



# R - 3



あたしはあなた？  
あなたはあたし？

芳田尚哉

## 【いつもの朝】

---

.....。

.....。

.....。

俺は心地よい闇の中にいた。どこまでいっても闇だけど、とっても心地いい。ずっとここにいたいくらいだ.....。

「.....ゃん」

.....ん？ なんだか、揺れるな.....。

「.....ちゃん」

ああ、だんだんと闇が薄れていく。

「.....お兄ちゃん」

.....誰の声だ？ 誰かが呼んでいるような気がする。

「お兄ちゃん、起きてよ」

.....ん？ .....この声は.....？

「.....っていうか、起きろっ！」

声色が変わった。.....ヤバッ！

俺は慌てて飛び起きた。

「あっ、起きた」

と、残念そうな声がした。

俺の目の前には分厚い百科事典がある。

「お前は、どうしてこうも毎朝毎朝俺を殺そうとするんだ」

俺は百科事典を構えている妹に言った。

「ひどいわ、お兄ちゃん。あたしの愛がわからないの？ あたしは、お兄ちゃんを起こそうとしてあげてるだけじゃない」

起こそうとしている.....？ そんなものをまともに食らえば永眠も不可能ではないぞ。

「なあ、歩」

俺は目の前の妹に言う。

「なに？ お兄ちゃん」

歩は小首を傾げてニコリと笑う。

「なにじゃねえ！ いいかげんやめろ。ここままじゃ、いつ死ぬかわかったもんじゃない」

「じゃあ、ちゃんと起きてよ」

「うっ.....」

.....正論かも知れない。言い返せない。

こうして、いつもの毎日が始まった.....はずだった。

## 【遅刻ギリギリ全力ダッシュ！】

---

「やった！ ついに完成したぞ！」

化学室で白衣の男がフラスコを片手に雄叫びをあげた。

「ふっふっふっ……これでノーベル賞も間違いなしだ。ついに僕の時代だ！ そうさ、世界は僕の手に中に……はっはっはっ！」

と、サイコな叫び声は朝の学校に響いていた。

「どういう事ですか」

一人のご立腹の女生徒が後部座席にどかんと腰を下ろしていた。

「申し訳ありません、お嬢様」

運転手が謝罪しながらもアクセルを踏み込む。

「急ぎなさい、草加。このわたくしが遅刻などと、赦されるはずがないじゃありませんか。わたくしは、何事においても完璧でなければならないのですよ」

女生徒はなおも声を荒げる。

早朝の街を、黒のメルセデスが猛スピードで駆け抜けていく。

「まったく、どうして走ってるんだ？」

俺は自分の状況が納得できなかった。

「なに言ってんのよ。お兄ちゃんが寝坊するからいけないんでしょうが。お兄ちゃんは自業自得だけど、あたしは関係ないんだからね。起こしてあげてるだけなのに、どうしてあたしまでこうなるのか、そっちの方が理不尽よ、もう……」

……言い返せない。事実だ。

まあ、文句ばかり言っても仕方ないか。

そう思う事にし、俺と歩は学校への道をひたすらに駆けていた。

「よしっ、正門が見えた！」

——キーンコーン！ キーンコーン！

ヤヴァイ、遅刻だ！ 全速力だ！

……と、それがいけなかったんだ。

## 【全員集合だよ！ 危機は目の前！】

---

「ちーこーくーすーるー！」

「遅刻、遅刻！」

「遅刻してしまいますわ！」

俺と歩そして……麗華の声が……って、なに？ レイファ？ どうしてレイファがこの時間にいるんだ？

だいたい、こいつは紫藤グループのお嬢様だとかで、いっつも黒塗りのベンツ……いや、黒のメルセデスと言いなさい、とか言われてたな……それはともかく、その黒のメルセデスで登校してるんじゃないか？ だから、遅刻ギリギリの俺たちと会う事なんてなかったように思うが……。

しかも、本名はレイカなのに、意味不明にも中国語（っぽい）読みのレイファで呼びなさい、とかわけのわからん事を言うし。なんだか、妙なお嬢様だ。意味の分からない自己顕示は本当に意味がわからん。

だが、それに従う（つうか、どうでもいいんだが）俺たちも俺たちなのか？

だが今は、そんな事よりも……。

「遅刻しちまう！」

俺たち三人は並ぶように走っていた。お嬢様のくせに、レイファのヤツ結構足が早いな……。俺はそんな事に感心していた。

って、何度もだが、そんな事を考えてる場合じゃねえっ！

「遅刻しちまうっ！」

俺たちは全力疾走していた。

「よっしゃ、完成だ」

白衣の男は化学室……といっても、実は学校の敷地内に建てられたプレハブ小屋からフラスコ片手に飛び出した。一刻も早く先生に報告したかったのだ。彼も全力疾走で校舎に向かっていた。

……ん？ あれは、マッドサイエンティスト櫻井じゃないか。どうしてあいつが……って、ぶつかる！

【なんぢゃこりゃ！ どうなってんの！】

---

――ドーンッ！

――バシャッ！

――パリンッ！

様々な音が飛び交う。

「ててて……」

俺は頭を押さえる。よくはわからんが、ものが見事にぶつかってしまったらしい。

「いったいわね～」

そんな事を言いながら、妹の歩が起きあがる。

……ん？ こいつって、こんな喋り方だったか？

「いったいよお……」

レイファも頭を押さえながら起きあがる。

「もう、どうなってんの？」

………？

俺の頭に疑問符が浮かぶ。漫画やなんかだと、確実にクエスチョンマークが俺の頭上を飛んでいるだろう。まさに、そんな構図だった。

「……あっ……あっ……」

俺がそんな事を考えている時、櫻井だけはみんなと違う行動をとっていた。

櫻井は膝を崩して、手をワナワナとさせている。そう、なにか大事なものが壊れてしまった時にするかのように……って、をい。フラスコが割れてる……。

俺は思考回路をフル稼働させた。

櫻井がワナワナしている→フラスコが割れている→櫻井はなにかを持っていた→櫻井はマッドサイエンティスト→なにかヤヴァイものを製造した→危険！

ヤヴァイ！

「どうしたの、お兄ちゃん」

「ああ、ちょっと……って、ええっ！」

俺にそう話し掛けたのはレイファだった。ど、どうなってんだ？

「どうしたの、お兄ちゃん……って、ええっ！」

……もう、わけがわからんっ！

## 【マッドサイエンティスト櫻井ここにあり！】

---

「あーっ！ 僕のノーベル賞があっ！」

俺の困惑を余所にマッドサイエンティスト櫻井は絶望の雄叫びをあげていた。

「僕のノーベル賞確実の発明品が……超電導液が……」

櫻井は悔しそうに地面にこぼれてしまった液体を見ている。本当に名残惜しそうだな。

「櫻井、これはどういう事なんだ」

とにかく、この状況を説明できるのはこいつしかいないだろう。

「……どうしてくれるんだ。僕のノーベル賞を返せっ！」

「落ち着け、櫻井」

俺は襟首を掴もうとする櫻井の手を払い除ける。

「せっかく、ノーベル賞で僕に、この発明を……」

櫻井、日本語がおかしい。

「とにかく、お前はなにを発明したんだ」

俺が訊くと、櫻井は急に元気になって、

「よくぞ訊いてくれた。この僕が発明したものは、ズバリ超電導液！ この液体はあらゆる電気情報を伝達させる事ができる液体。そう、これを使えば人間の記憶を伝達する事さえも可能！」

……ん？ ちょっと待て。

「櫻井、お前は今なんて言った？」

「ん？ だから、人間の記憶を伝達する事も可能……そこでいいんだろ？」

「ああ、それってもしかして……」

俺は側で頭を押さえてうずくまっている二人の女生徒を見た。

「こういう事か？」

「……ん？ もしかして……」

櫻井は二人をよく見る。

「なんですか？」

「なんですか？」

「おお、成功だ！ これでノーベル賞だ！」

つまり、お前の発明品で二人の人格が入れ替わった……と。はあ～……。

## 【ややこしいったらありゃしない】

---

「なんでもいいから、早くこれを元に戻せ」

「無理」

……。即答？

「残念ながら、その超電導液は偶然の産物なんだ。これから本格的に研究して完璧なものにしようとしていたのに……その矢先にこれだからね」

「待て。じゃあ、これはどうなるんだ？」

「さあ？」

「さあ？ ……じゃねえっ！」

……ったく、厄介な事になっちゃった。いつもと同じ毎日のはずが、ひよんな事から妹の歩と麗華の人格が入れ替わってしまった。にしても、なんでよりもよってレイファなんだ？

「とにかく、これからどうするかだな……」

俺は中身は歩のレイファと中身はレイファの歩を交互に見た。ややこしい。

「ちょっと櫻井くん。早々になんとかしてくださる」

歩の声でレイファが言う。違和感があるな、やっぱ。

「そうですよ、櫻井先輩。なんとかして下さいよ」

レイファの声で歩が……。以下同文。

「とにかく、今日はサボるぞ」

俺は二人の手を引き、化学室という名のプレハブ小屋に向け走りだした。

「櫻井も来い！」

「あ、うん……」

「さて、櫻井にはもう一度同じものを作ってもらおうとして……」

「ちょっと待った。あれは偶然の産物だって言っただろ。そう簡単にできないよ」

「それでも作れ」

「そんなぁ……」

「で、問題はこの二人なんだよな……」

この二人をどうするかだ。にしても、本当に厄介な組み合わせだ。

## 【緊急事態！ 原理を説明せよ！】

---

「ところで、だ」

俺は、ちょっとした疑問を解決しておきたかった。

「なんだ、不動和己よ」

……どうしてこいつは人をフルネームで呼ぶんだ？

だが、今はそんな事はどうでもいい。

「どうして、二人の人格が入れ替わったんだ？」

そう、初歩的かもしれないが、一番重要な部分だ。

「それはだな、記憶というものは電氣的な刺激によるものであるという事は不動和己も知っていると思う。それに従うと、人格なども電氣的なものであると考えられる。それを、この僕が発明した超電導液によって相互交換が行われたと考えている。その結果、不動歩と紫藤麗華の人格が入れ替わってしまったのだろう。事実、魂や幽霊なども電氣的なものと解釈されているようだから、あながち不可能な事ではない。つまり、それを成し遂げた僕は、本来ならノーベル賞を授与されるはずだったんだ。そして、いずれは世界をこの手にする事ができたんだ。それを不動和己、お前は……」

……マッド思考なヤツだな、相変わらず。まあ、それでこそ櫻井純平らしいがな。

「まあ、よくはわからんが、なんとなくの原理は理解できた。で、この二人を元に戻すには、もう一度そのなんたら液を……」

「超電導液だ」

「わかった、その超なんたら液を……」

「超電導液」

「……ったく。超電導液を使わなきゃならんわけだな」

「そうなる」

「で、当面の問題はこの二人をどうするかだが……」

と、その問題の二人を見ると、なんだか歩（中身はレイファ）がむくれっ面をしていた。



## 【レイファのお楽しみ】

---

「どうしたんだ、レイファ」

「いえ、この櫻井めが、わたくしの事をレイファと呼ばないものですから」  
「まったく、そんなくだらない事かよ。」

「別に、そのくらいいいじゃないか」

「まあ、それはこの際どうでもいいのですわ。どうやら、この流れですと、わたくしは歩さんの姿をしているいじょう、今日はあなたの家に行かなくてはいけないようですわね」

「そういえばそうだ。正直、俺はそこまではまだ考えていなかった。レイファ、お前すごいよ。うん、感心した。」

「……って、ええっ！」

「お、俺の家にレイファが……」

「俺はあまりの事に戦慄を憶えた。」

「そういう事になるね、お兄ちゃん。っていう事は、あたしは今日はあの黒のメルセデスに乗れちゃったりするわけね」

「……って、嬉しそうだな、歩。」

「まあ、あなたのお宅に泊まるのは仕方ないですわ。ですが、今週はわたくしが楽しみにしていた満漢全席週間でしたのに……」

「レイファさん、なんなんですか、その満漢全席週間というのは」

「それはですね、百八の料理を七日間全二十一食に分けてちよつとずつ食べるんですの。ちなみに、今日の夕食は麻婆豆腐と八宝菜と酢豚に青椒肉絲。デザートには杏仁豆腐だったのに……残念で仕方ないですわ。もう、それだけが本当に残念で残念で……」

「……なんだか、えらく庶民的な料理じゃないか？ まあ、調理法はともかくとして、その名前の料理ならレトルトとかでなんとか俺でもできそうだが……。」

「……って、なんだか、もうレイファが俺の家に泊まる事を前提に考えていないか。」

「というわけで、仕方ありませんわね。愚民の……いえ、庶民の小屋に泊まりますわ」

「……言うねえ、レイファ。確かにお前からすればそうだろうけど……はあ〜。」

## 【歩の不満タラタラ文句山盛り】

---

「あの……レイファさん」

「なにかしら？」

「どうして満漢全席なのに、そんな庶民的な料理なの？ 普通、満漢全席って云ったら、フカヒレだとか、ツバメの巣だとか……そんな高級料理じゃないの？」

……そういえばそうだな。満漢全席ってのは、皇帝が三日三晩掛けて食べたとされる超高級料理の数々じゃなかったか？ とすれば、レイファが言った料理は美味しいがこの場合は少し違うような気がする。

「そんな事、簡単ですわ。あまり高級料理ばかりですと、胃に負担が掛かりすぎますわ。中華料理というものは、基本的に油が多いんですよ。それも、高級料理と称されるものほどですの。ですから、たまにこういう負担に少ない料理を取り入れてもらっていますの。今日はちょうど箸休めなのですわ」

……理に適った食べ方だな、おい。

「ところで、レイファさん。このメニューって今から変更できないの？」

「無理ですわ」

「どうして？」

「本日の麻婆豆腐の豆腐は今現在作られていますの。豆腐は作りたてが一番ですから。それに、新鮮な竹で竹包丁も制作中です。ですから、変更は出来ません。それらの材料を粗末に扱うなど、人としてしてはいけない事ですから」

ををっ、レイファのヤツ、えらくまともだな。贅沢なのかそうでないのか微妙だが。……いや、そのこだわりは贅沢以外のなにものでもないな。

「ちえっ……満漢全席って云うから、どれだけ凄い料理かと思ったんだけどな……だってさ、満漢全席と云えば満民族と漢民族の和睦のために開いた宴会料理でしょ。なのに……ふんだっ」

悔しそうだな、歩のヤツ。だが、レイファの姿だと似合ってるよな……ホント。

## 【麗華的謝罪】

---

「申し訳ありません、歩さん。今回は我慢してください」

……？ なんだか、妙にしおらしいなレイファのヤツ。

「ですが、庶民の料理と申されても、うちの料理人が作るものは、本場の菜館にも負けないものですから。ただ、日本人好みにアレンジされておられませんので、お口に合うかはわかりませんけど」

やっぱり、庶民的な料理でも普通じゃないんだな……。つうか、こいつを物差しで測るなぞできるはずもないか。

「ですが、そのお詫びというのもなんなのですが、近々また宮廷料理月間を設けようと思っていますの。よければ、歩さんをご招待しますわ」

……宮廷料理月間……って、をい。宮廷料理って……。

「わあ、ありがとう、レイファさん。お言葉に甘えさせていただきます。もう、感謝感激雨霰です。まさか、宮廷料理を食べられる日がくるなんて……。宮廷料理三千品目……食べられるかな……」

いや、無理だろう。一月を最高の三十一日としても、一食当たり三十二～三品目。到底、食べられる量じゃない。少しずつだとしても結構な量だ。

「それと、ごめんなさい、レイファさん」

「なにがです？」

「さっき、満漢全席なのにどうしてこんな料理なのかって、文句を言ってしまってた」

「ああ、その事ならもうよろしいんですよ。過ぎてしまった事ですから」

レイファのヤツ、なんという器量の深さだ。

「いくら料理名が庶民的であっても、その調理法が全然違いますものね。もう、こだわりが違っているのか。あたしたちが作るものとは全然違うんですもんね。なんだか、今からお腹が空いてきちゃったな……」

歩よ、お前はお前ですごいかもしれんぞ。

「どうでもいいが、これからどうするか考えた方がいいんじゃないか？」

唐突に、マッドサイエンティスト櫻井の分際で櫻井が至極当然の事を口にした。

しかし、それは当然であり当たり前。それに移行できなかった俺たちに問題があるのには違いない。

.....完敗だ。

しかしまた、どうして俺たちは中華について熱くなっていたんだろうか.....。

思い返してみる。

.....。

レイファだ。レイファが言い始めたんだ。諸悪の根元はレイファにあり！

そんな事はもうどうでもいい。過ぎ去った事を悔やんでも仕方ない。そう、今、目の前のこの状況も目を背けてはいけないのだ。

だが、これをどうすればいいのだろうか.....全ては櫻井に掛かっている。

「これからどうするか、でしたわね。今日はこのままそれぞれの家に帰った方がよろしいんじゃないかと。不必要に人前に入るよりも、ひっそりとしていた方が懸命じゃないかしら」

「そうですね。さすがレイファさん」

と、しきりに感心する歩（外見は麗華）。

「という事で、あたしは黒のメルセデスで豪邸へ！」

「嬉しそうだな、歩」

「うん、もう楽しくて仕方ないよ。こんな事でもないと、メルセデスなんて乗れないじゃない」

「そうでもないぞ。昔はそうでもなかったが、最近では普通に乗れる車だと思うぞ。どうも、今でも高級志向があるが、日本の車も負けてはいないからな.....車種によっては、メルセデス以上の高級車だって.....」

「でも、やっぱりメルセデスはいいよね.....」

.....中華談義の次はメルセデス談義か？ もう、いい加減にしてくれよ。

## 【車トークだ！ 作戦会議だ！】

---

「ですが、その意見はごもっともですわよ。最近ではメルセデスも普通に買えますし……ただ、メルセデスの略し方ですが、日本人はどうしてこうも世界に反抗しようとしているのでしょうかね。普通、世界ではメルセデスと呼ぶのに、日本だけはベンツと呼ぶのですから。そうまでして、日本は世界に反抗したいのでしょうか。それとも、ただ単に無知なだけなのでしょうか」

……レイファのヤツ、語るね……。しかも毒舌。お前の発言は日本を敵に回しそうだぞ。

だが、どうしてそうなってしまったのだろうか。

メルセデス・ベンツ……普通は最初の方を言うのに、日本では後半の方で呼ぶ。奇妙ここに極まれり。

だが、今はそんな事などどうでもいい。

「それよりも、さっさとこれからの事を決めようぜ。とにかく、レイファは俺の家に来て、歩はレイファの家に行くんだよな。まあ、それは仕方ないでしょう。で、学校はどうする？ しばらく休むか？」

……生活は俺たちがなんとかすればいいが、学校はどうだろうか……。授業などで問題がありそうなのだが……。

「そんなのノープロブレムよ、お兄ちゃん。きっとなんとかなるって」

「そうですね。そのくらい、なんとかなりますわよ。ずっと家にいるのはイヤですし……授業にはちゃんと出席しませんと」

……どうも、いまいち厄介さが理解されていないような気がするが……。それとも、意外とどうとでもなるのかもしれない。まあ、なるようになるさね。

「で、問題はお前なんだが……」

それを合図に俺たち三人が一斉に櫻井を見る。

「超電導液はどうだ？ できそうか？」

「わからんと言ったろうが」

……本当に大丈夫なのだろうか？

## 【なんか変わってない？】

---

「さて、とにかく今日は帰りましょうか」

「そうですね。早く黒のメルセデスに乗りたいです」

なんの気なしに言うレイファと嬉しそうな歩。それぞれ中身は異なるが……。

「そうするか。じゃあ櫻井、頼んだぞ」

「って、勝手に頼むなよっ。自分たちはそれぞれの家でのほほんとマブってラヴしてればいいんだろうけど、こっちはそうはいかないんだぞ。ノーベル賞を遠のかせて、さらにはこき使う…  
…鬼、悪魔、鬼畜めがっ！」

「ちょっと待て。たしかに後半は認めよう。現に俺はお前をこき使っている……かもしれん。だがな、前半はキツパリと否定させてもらうぞ。俺は別にラヴっていない」

「なに言ってんの。マブでラヴな事するつもりなんでしょ。でもやめておきなよ。中身は麗華だけど、その身体は不動歩のものなんだからな。不義の関係なんだからな、不義でないように思えて」

……櫻井純平よ、キャラが変わってないか？ 何故に、そのようにピンクネタを……らしくないぞ。

「……お兄ちゃん、あたしの身体なんだからね。変な事しちゃダメだからね」

「お前も……はあ……んな事、するわけないだろうが。どうして俺がレイファに欲情せねばならんのだ」

「……お兄ちゃん」

レイファ（歩）が俺の横を指す。確かそこには歩（レイファ）がいたはず……なぬ？

「ひどいですわ……。わたくしはそんなに魅力がありませんの？ そんなにつまらない女なんですの？ そんな……酷いですわ……」

って、なんで泣いてるんだ？ つうか、そういう問題か？ なにか違うだろ？ つうか、話が変わってきてないか？

「どうでもいいから、さっさと帰るぞ！」

とにかく、俺たちはそれぞれの行動を開始した。

## 【お宅拝見！】

---

「ここが……………」

俺の家を見てそう感嘆するのはわかるんだが、なんだ、その無言は。言いたい事があるならばつきりと言えよ。

「……なんだよ、レイファ。悪いな、しょぼい家で。だがな、庶民の中ではそここの家だと思うんだがな……」

レイファはじっと俺の家を見上げたまま動こうとしない。

「……申し訳ありません。なんだか、庶民だな……と思ひまして」

グサッ！

庶民で悪うございました。

「ですが、それはそれで素敵ですわね。今日からここで過ごすのですわね……って、あれ？」

「どうした、レイファ」

レイファは門の所で立ち止まったまま動かない。

「どうなってますの？ この門、開きませんわよ」

「そりゃそうだろ。なにもせずにそのまま立っていても開くはずないだろ」

「そんな事ありませんわよ。門というものは、人が立てば開くもののはずです」

……こいつの家、やっぱり自動ドアなんだろうな。金持ちめ。ブルジョアめ。

「レイファ、普通の門は勝手には開かないんだ。レイファの家の方が普通じゃないんだ」

「……そうなんですの。では、これはどうやって開けるのですか？」

「……ったく」

俺はいつものように門を押した。

「すごいですわ。そうなのですね。手で動かせるようにこのように小さいのですね。そうですわよね。わたくしの家くらいの大きさですと、手で動かすのは大変ですからね」

悪かったな、小さなアルミ製のしょぼい門で。

ったく、こいつとの生活、大変だな……。

一方、黒のメルセデスに乗っている歩（外見はレイファ）は、窓の外の景色を堪能していた。  
（すっごいな……。レイファさんは毎日こんな風景を見てるんだな……）

流れる景色。優雅に走る黒塗りのベンツ……いや、黒のメルセデス。

（気のせいかな？ どこかしら周囲の車が怯えているように思えるんだけど。まあ、黒のメルセデスって云ったらやっぱりちょっと怖い系の人ってイメージがあるのかな……。まあ、レイファさんも違う意味でちょっと怖い人なんだけど。でも、そこがレイファさんの魅力なんだよね……。あのお嬢様ちつく……。ってというか、マジお嬢様なんだけど、もう、漫画とかに出てくるお嬢様を地でいくような感じがいいんだよね……。もう、世間知らずの傍若無人的なところが。うっとりしちゃうな……。憧れちゃうな……。でも、それだけじゃなくて、ちゃんと常識をわかっているっていうのも魅力よね。ただ単に我が儘な人なら、絶対……。これは断言できる、好きにならなかったな……。もう、友人として、先輩として……。やっぱり憧れちゃうな……。もう、お兄ちゃんと同じクラスでよかったよ。でなきゃ、レイファさんとこんなに親しくなれなかつたらうな……。もう、この事に関してはおにいちゃんに感謝しないとね……。お兄ちゃん、ありがとう。それとついでに櫻井さんもありがとう。あの人のマッドな発明品が無ければこんな事になってなかつたらうし。でなきゃ、こうして黒のメルセデスに乗る事もなかつたらうし。さらには満漢全席……。という名の料理名は一般的だけど普通じゃない中華料理を食せるわけだし。もう、どれだけ感謝してもしたりないかも。うふふっ、だよな……）

（お嬢様、どうされたんでしょうか？）

いつもとは雰囲気が違うレイファに戸惑う運転手の草加であった。



## 【途方に暮れる兄妹】

---

「とりあえず、レイファは歩の部屋を使ってくれ」

俺はレイファを歩の部屋に案内する。久しぶりに入るが、昔とは全然違っていた。きちんと片付いていて、可愛い小物とか、ぬいぐるみとか……そういうものがいっぱいあって……なんて云うか、女の子の部屋ってヤツだった。

「どうかされましたの？」

不思議そうな顔で俺を見る。きっと、俺は変な感じだっただろう。

「ああ、なんでもない。久しぶりに歩の部屋に入るものだから……」

「そうですわね。乙女の部屋にはそうそう入らない方がよろしいですものね」

「……そうだな」

なんだか、いますぐ出ていけ的な雰囲気だ。

「じゃあ、俺は出ていくけど、歩に怒られるから、あんまりいじくり回さないでくれよ」

「わかってますわ」

……俺は心配ながらも自分の部屋に戻る事にした。まあ、隣なんだし、なにかあればすぐに駆けつけられるだろう。

とりあえず、これからどうするかを考える事にしよう。

「すっごーい」

思わず声に出す歩。

(いっけない、あたし今はレイファさんなんだ。レイファさんになりきらないと、変に思われちゃう。気を付けないと)

「お嬢様、どうかなされましたか？ 本日はご気分でもすぐれませんか？」

「いえ、別になんでもありませんわ」

「そうですか。では、わたくしはここで失礼させていただきます」

一礼をし、草加は車へと戻っていった。

(さて、ここからどうするかよね……こんな広い屋敷からレイファさんの部屋をどうやって見つけるのよ)

## 【まったりとした2人の時間】

---

ー トントン トン……！

心地いい音が響く。俺は今、晩御飯を作っている。

あれからどうするか考えてみたが、結局いい案は浮かんでこなかった。成り行きに任せるしかないようだ。

そして、唯一の頼みの綱であるはずの人物がマッドサイエンティストなのだ。もう、諦めの境地に達してしまっている。

しゃーないわな。

開き直す事にし、俺は気分転換を兼ねて晩御飯を作っているわけだ。

ちなみにメニューは、レイファが楽しみにしていたものとは格が違うが、同じ料理名のものを作っている……といっても、たいていが野菜を一品加えるだけとかそういうヤツだ。一から作るなんて、素人の俺にできるはずもない。まあ、スーパーで出来合いを買ってこなかっただけ、俺は進歩したのだろうか？ まあ、どうでもいいけど。

「いい匂いですわね……」

匂いにつられてか、二階からレイファが降りてきた。

「ああ、レイファか。お前の楽しみにしていたものとは違うだろうが、俺なりに精一杯作らせてもらってるよ。まあ、お前の家の料理人が作るものとは雲泥の差だがな」

……どうして俺は笑顔で言ってるんだろう？ 何故？

「確かに、我が家の料理人の作るものとは少し匂いが違いますわね。ですが、これはこれでいい匂い……美味しそうですわ」

「まあ、そんなに言ってもらえて嬉しいが、あんまり期待されても困るぞ。いくら、ほとんどレトルトに近いからと云っても、やっぱ俺の調理次第だからな。まあ、期待せずに待っていてくれ」

「わかりましたわ。楽しみにしていますわね」

……ったく。だけど、なんだかいいもんだな、こういうのって。不思議な気分だ。

【これぞ雲泥の差～楽あれば苦ありってね～】

---

「ほれ、できたぞ」

味見をしてみたが、失敗ではないようだ。普通の味がした。まあ、ほとんどレトルトに近いから、よほどでないかぎり失敗はないだろうが。

「ホント、美味しそうですわ」

レイファは目を輝かせて目の前の皿を見ている。

麻婆豆腐、八宝菜、酢豚、青椒肉絲、杏仁豆腐……なんとか俺にも作れそうな（インスタント／レトルト系がある）ものでよかった。ホント、よかったと思う。

「では、いただきますわ」

レイファは、レンゲで八宝菜を小皿に入れる。

「いただきます」

礼儀正しくそう言うと、レイファは八宝菜を口に運ぶ。

「……んっ、んっ、んっ……」

レイファはゆっくりと味わうように咀嚼する。

「ど、どうだ？」

それを見て、思わず訊いてしまう。

「……美味しいですわ」

よかった。ホッと胸を撫で下ろす。

「いつもとは違いますけど、これはこれで美味しいですわ。これが庶民の味なんですわね。これでしたら、全然問題ないですわね」

……だが、やはり棘があるように思われる。まあ、それがレイファと云えばレイファなのだが。

「今頃、歩さんはうちの料理人が作ったものを食べているのでしょうか」

……そうだな。少し歩が羨ましいな。

とかなんとか不動和己と紫藤麗華がくつろいでいた頃、不動歩はと云うと……。

# 「ここはどこなのよーっ！」

紫藤家の敷地内で迷っていた。

「お腹空いたよーっ！」

## 【レイファお嬢様行方不明につき捜索隊出動せよ！】

---

レイファの帰りがあまりに遅いため、紫藤家に緊急サイレンが鳴り響く事となった。

敷地内に森を有する紫藤家では、時折迷ってしまう人間がいる。もちろん、慣れてくれば迷う事はないのだが、やはり初めての人間はそうはいかない。

その例に洩れる事なく、歩（外見はレイファ）も迷ってしまったのだ。

しかし、中身が入れ替わったなど露とも知らない紫藤家側は、今回の事に首をひねる。そもそも、自分の家なのである。この家で十数年を過ごしているのである。今更迷うはずなどない。

そこで考えられたのが誘拐だった。しかし、門のセキュリティは完璧で、周囲の壁からも侵入者はなかった。もちろん、外に出た形跡も同じくなかった。

という事は、迷子である。しかし、やはり紫藤家としては納得がいかない。

確かに、レイファが迷子になった事はあった。しかし、それはレイファがよちよち歩きの頃の事で、今の状況で迷子になるとは到底考えられない。

だが、なにかがあってはいけない。あってからでは遅い。

そこで今回、捜索隊の出動と相成ったのである。

「お腹ペコペコお～」

歩は、そのような大騒ぎになっているとは……気付いていた。

なにせ、異常を報せるサイレンの音は近隣に響いていたからだ。しかし、この音が歩の声をかき消してしまった。緊急事態を報せるものが、事態をさらに悪化させてしまうという皮肉な結果になってしまった。

「もう……なんなのよ。あたしって不幸だ～！」

しかし、その声は誰にも届かない。

紫藤家の森に、虚しくサイレンの音が鳴り響いている。

## 【捜索隊、捜索続行するも結果未だ出ず】

---

「ったく、どうなってんのよお〜！」

迷子の歩はどうする事もできずにいた。自分の存在をアピールするために叫ぶも、けたたましいサイレンによってかき消されてしまう。

「もう〜……あたしって、世界一不幸な……」

と、どこぞの魔女見習いのセリフを言いかけて歩は沈黙した。

なにかが見えた。

歩はじっとその方向を見る。

「……灯りだ」

懐中電灯の灯り……なんていうちっぽけなものではなかった。そのような光ではおそらく見えていない。

誰かが歩の元に近付いてきている。

「ここだよおっ！」

歩は必死に叫ぶ。

「おい、あっちの方で声がしたぞ」

その中の一人が歩の声に気付いた。

「助かったよお〜」

歩は安心から脱力してしまう。

捜索隊は、声がした方のだいたいの見当をつけて進むが、一向に姿を見つける事ができずにいた。

「そういえば、歩さんは大丈夫でしょうか？」

デザートのアレンジ豆腐を食べながらレイファが呟いた。

「なにがだ？」

「紫藤家には大きな森がありまして、初めて訪れる方は家の者と一緒でないと例外なく迷われるのです。歩さんもおそらく一人でしょうから、迷われているかもしれませんわ」

「なんだ、その森ってのは」

「ええ、わかりやすく言うと、樹海とでも申しましょうか。磁石などが全く通用しないんですの」

「それってヤヴァくないか？」

「危険ですわね」

歩は……大丈夫なのだろうか？

## 【兄の心配～妹よ無事でいろ】

---

「迷われていなければよろしいのですが……」

レイファが窓の外を見る。

「最悪の事態というヤツですわ」

レイファはその光景を見て確信する。レイファの屋敷がある方向を見ると、ヘリコプターがサーチライトを照らしている。

「あれってもしかして……」

「そうですわ。歩さんは迷子になっているのでしょうかね」

サラッと雷フア。をいをい。

だが、どうするんだ。屋敷の中に森があるって云うだけでぶったまげだろ。想像なんてできるわけないだろう。しかも、樹海だって云うんだから言葉もない。

歩がそこに迷い込んでいるんだから、大変な事だ。

……って、俺もどうしてこんなに冷静なんだよ。歩が樹海で迷子って、大変もここに極まれりって感じじゃないかよ。

「レイファ、なんとかできないのか」

「捜索隊なら大丈夫だと思いますが、なにしろ広さが広さですからね。紫藤家の捜索隊をフル稼働させても、至難の業でしょうね。ちなみに、わたくしが幼い頃に迷子になった時は、丸一日くらいだったでしょうか。今では笑い話ですが、当時は本当に死ぬかと思いましたわ。実際、発見された後すぐ入院しましたわ。もう、大変でしたわ」

……………。

ヤヴァイじゃん。

ヤヴァすぎじゃん。

「レイファ、お前でも捜せないか？」

つい、レイファに掴みかかってしまった。

「放して下さい。……わたくしも心配ですけど、なにも出来ない事も事実なんです。ここは、紫藤家の捜索隊を信じるしかありませんわ」

「そうか……」

ここまで言われれば信じるしかないな。

歩、無事でいろよ。

【任務完了！ お祝いモードに移行せよ！】

---

「神様……」

灯りを見て一安心した歩であったが、それ以降なんの変化もない事に不安が再び襲った。  
そんな歩にできる事は、神様に祈る事のみだった。

「お兄ちゃん……」

ふと、兄である和己の顔が浮かんでくる。心細い時に思い浮かぶのは、やはり家族の顔のようだ。

「……お腹空いたよお～」

そんな歩が一番困っている事は、空腹だった。

「このまま飢え死んだら呪ってやるんだから。覚悟してなさいよ、櫻井さん」

少し前には感謝しておきながら、今は恨みの対象でしかない悲しい存在のマッドサイエンティストであった。

「お嬢様！」

ふと、声がした。

「あっ……」

その方向を見ると、捜索隊がいた。捜索隊はテレビの撮影などで使われるようなライトで歩（しつこいようだが、外見はレイファ）を照らす。

「お嬢様を発見しました」

捜索隊の一人が無線に向かって叫ぶ。

その次の瞬間、空から照らされていたサーチライトの色が様々に変わった。

「どうやら、発見されたようですわ」

ずっと窓から見ていたレイファがサラリと言った。

「マジか」

「ええ、サーチライトがお祝いモードに移行していますから」

お祝いモードね……言い得て妙だな。なんだか、脱力してしまう。

「よかった……よかったな、歩」

俺はホッと胸を撫で下ろした。

## 【初めての夜——その過ごし方は？】

---

「歩さんも無事だとわかりましたし、今日はそろそろ寝ませんこと？」

……寝る？

「どうしましたの？ いつもはもっと遅くまで起きてますの？」

……時計を見る。

二十四時少し前。

「レイファは、いつもこのくらいか？」

「そうですね。その日のうちに寝ないといけませんわ。翌日になってしまいますもの」

確かにそうなのだが……。

「では、わたくしはそろそろおいとま暇させていただきますわね」

そう言うと、レイファは階段を上がっていった。

そうか、今日はレイファと二人きりなんだ……。なんだか、改めて考えるとものすごい状況なんだな。……って、なにをヤヴァげな妄想を……。

ブンブンと頭を振る。

そうだな。せっかくだからもう寝よう。なんだか疲れる一日だったし。

俺は自分の部屋に向かった。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

「お腹空いたよお～」

歩は草加の問いに情けない声で返す。

「すぐにお嬢様の夕食の用意を！」

草加の声に屋敷が慌ただしくなる。そして、数分後には歩の前に皿が並べられた。本日の夕食、満漢全席週間の例の料理だ。

「美味しそう……」

楽しみにしていた＋先程の極限状態＝空腹最大限——というわけで、歩はがつつくように食べる。というか、がつついている。

「お嬢様……」

草加は今まで見た事もないレイファの様子に戸惑いを隠せなかった。それは、屋敷の者全員に共通するものだった。

そんな中、歩はひたすら料理を喰っていた。



## 【一緒のお部屋にお泊まり？】

---

俺は、自分の部屋のドアを開けた。

「さて、疲れたからぐっすり寝るか……って、俺たち風呂に入ってないような……」

ふとそう呟いた時だった。

「本当ですわ。わたくしとしたことが……このような姿のまま眠りにつこうなんて、はしたないのにも程というものがありますわ」

……ん？ どうして歩の声が？ って、なんでここに歩（レイファ）がいるんだよ。

電気をつけると、予想通り、歩が俺のベッドにいた。

「なんでここにいるんだ？ お前は歩の部屋を使えと言っただろうが」

「いえ、無断で人様のお部屋に泊まるなんてできませんわ。ですが、ここなら本人もいる事ですし、問題はないでしょう？」

……確かに、その点での問題はないと云っていいだろう。だが、これはこれで別問題が発生する。

「あのなあ、ここで寝るとだな、色々とまずいだろ？ ほら、やっぱりさ……なんつうか、その……なんだ。ほれ、な」

なんだかしどろもどろになる。

「そうですか？ とにかく、今はそんな事よりもお風呂に入りたいですわ」

「そうだな、今から湯を入れてたら時間が掛かるな……」

「構いませんわ。このままで過ごすよりは断然マシですわ」

「じゃあ、今から風呂の用意するから、ちょっと待ってろ」

そう言い残すと、俺は風呂場に向かって湯をひねった。

なんだかな……。どうしてこうなってるのかね……。つうか、なんでレイファが俺の部屋に…  
…はあ～……今日はソファで就寝か……かったる。

これからこんな毎日が続くのか……大変だ。

改めて自分の状況を理解した深夜だった。

## 【レイファの意外な発言にドッキリ】

---

翌朝――俺が初めてレイファと過ごした夜が終わった。まあ、なにもなかったが。結局レイファは俺の部屋から出ていかなかったし、俺が部屋を出ていくのも赦さなかったので、俺は床に布団を敷いて寝る事になった。まったく……どうしてこうなるんだ？

そんな事はまあいいだろう。問題はこれからだ。学校……どうするかな。

歩はレイファを演じられるだろうが、レイファは歩を演じる事ができるだろうか？ それが心配だ。

いつまで続くか……それも問題だな。毎日がこれじゃ、大変だ、俺。

そんな事をぼんやりと考えていると、

「……ん……あれ？ ここはどこですか？」

と、寝ぼける声が聞こえた。

「……あれ？ どうしてわたくしは……あ、そうでしたわ。わたくし……あ、おはようございます」

情報理解力がすごくないか？ さすがレイファだな。

「ああ、おはよう、レイファ」

「おはようございます。昨晚はぐっすり眠れましたわ。今日もいい天気ですわね。なにか素晴らしい事がありそうなほどですわね」

ちょっとロマンティックと云うか、女の子の感性と云うか……まあ、男の俺にはわからんから、それがそうかもわからんが。

「そういえば、今日は歩さんとして授業を受けなければいけないのでしたわね」

「ああ……」

なんだか、えらく順応してないか？ 逆に俺は、毎朝の殺人未遂の儀式がないから、調子狂ってるんだけどな……。

「では、ブレイクファースト・タイムですわね」

……朝食……ねえ。

「では、準備しましょうか」

「え？ 準備って……」

「朝食はいつもわたくしが作るのですわ」

## 【至福の朝】

---

澄まし顔で朝食を作り始めるレイファ。

その手つきは一朝一夕のものではない。明らかに慣れている。

「もしかして、毎朝レイファが朝食を作っているのか？」

「そうですわ」

料理を作る手を止めずに言う。

「これも紫藤家のしきたりですわ。女子たるもの、料理くらいできなくてははいけませんわ。そこで、花嫁修業という事で、朝食はわたくしが皆様の分を作っていますの。料理人もお疲れでしょうから、朝はゆっくりと眠らせてあげるのですわ」

.....すごいな。毎朝、レイファが作っているのか。しかも、自分の分だけじゃなく屋敷の人間全員分のを。

「ああ、安心してくださいませ。今日はちゃんと二人分しか作りませんから。材料も、冷蔵庫の残り物を使わせて頂いていますし.....今更ですが構いませんわよね？」

「ああ、いいけど.....」

冷蔵庫の残り物？ えらく庶民的な言葉が出てきたな。似合わない。

とかなんとか考えていると、

「さあ、できましたわ」

レイファお手製の朝食が運ばれてきた。

「〈レイファ特製リゾット不動家冷蔵庫の残り物ヴァージョン〉ですわ」

.....すごくわかりやすい名前だ。しかもマジで美味そうだ。

「では、冷めないうちにいただきますしょう」

「そうだな。いただきます」

「いただきますわ」

そう言って、料理を口に運ぶ。美味しい。冷蔵庫の残り物でこれだけのものが.....意外だ。意外な才能だ。レイファは見かけで判断できないな。

「美味しいですか？」

「ああ、マジで美味しい」

俺は至福の朝を過ごした。ん？ 歩は.....。

「お嬢様、今朝の朝食の準備はまだなのですか？」

レイファが起きてきて朝食の準備を始めないのを不審に感じた草加がドア越しに言う。

(朝食の準備？ なに、それ？)

朝の支度をしていた歩は首を傾げるばかり。

「お嬢様、お身体の具合でも優れないのですか？」

ドア越しに心配そうな声が聞こえる。

(もしかして、このままじゃ怪しまれちゃうかな？)

そう考えた歩は、

「大丈夫ですわ」

と、元気を装って答える。

「そうですか。では、食堂で待っていますので。今朝のお嬢様の朝食、楽しみにしておりますから」

と、それだけを言い残して草加はドアの前から離れた。

「どうすんのよ。レイファさんって、毎朝朝食作ってるの？ お嬢様なのに？ **なんでなのよお～っ！**」

歩は自分が置かれている状況を呪った。

**「マッドサイエンティストめ、おぼえてやがれっ！」**

再び呪いの対象とされる櫻井であった。

しかし、いつまでもこんな事をしては怪しまれてしまうので、歩は心を決めて厨房に向かった。

「さてと、なにを作ろうかな……」

歩は考えあぐねていた。

「っていうか、あたしが作れる料理ってほとんど……っていうか、皆無だからな……。お兄ちゃん曰く殺人料理らしいし、それはあたしも自覚してるし……だから、いつもお兄ちゃんが料理してるわけだし……。って事は、あたしが作るとこの屋敷の人全員を殺しかねないわけで、っていうか、どうして屋敷中の人全員分なわけ？」

## 【歩のお手軽殺人料理 中編】

---

紫藤家のしきたりをも呪う歩であったが、ここで作らないのはそれはそれでまずい。怪しまれる事確実だ。だが、料理を作れば作ったで、怪しまれてしまう事確実。どちらの選択肢を選んでも結果は同じだ。違う点と云えば、前者であるなら死者がでないだけマシというくらいだろう。「どうしようかな……」

しばらく目を閉じて心を落ち着ける。

(そうよ、作るのよ。いつもお兄ちゃんが料理するところを見てるじゃない。あたしにだって、簡単な料理くらいできるはず)

と、料理を甘く見ている歩。

(なにか簡単にできるもの……)

歩は巨大冷蔵庫を開ける。その中には、ありとあらゆる食材があった。

(すごい……)

一瞬見とれてしまう歩。

(おっと、これじゃダメだ。早くなにか作らないと……)

散々考えた末、歩はスクランブルエッグを作る事にした。

(これなら、卵が潰れても大丈夫だし、あたしにだってできるはず)

そう考えて、歩は卵を割ろうとボウルに卵を……、

——グジャッ！

当てた瞬間、卵が潰れた。当然ながら、卵はボウルの中にも外にも散乱している。殻も粉々になっていて、このままでは非常にマズイ。

(あっちゃ……でも、殻にはカルシウムがあるっていうし、大丈夫よね、きっと)

歩は次々に卵を潰していく。一度たりとも成功しないのはさすがと云うべきだろう。

次に歩は中華鍋を火に掛けた。

(これなら大量に焼けるもんね)

歩は中華鍋にボウルの中身を入れた。

ジュウツという音を立て、卵が見事に鍋に引っ付く。

「あっちゃ……どうしよう」

鍋に付いた卵を取ろうと、歩は必死になるが、結局オロオロするだけでなにもできない。

「そうだ、油をひかないといけなかったんだ」

と、歩は油を……、

——**ポウッ!**

入れてしまった。途端に鍋が炎に包まれる。中華は炎の料理だ……が、これは中華ではないし、常識を遙かに越えており、天井を焼こうかという勢いだ。

「……………」

歩は、ただただ鍋を見つめていた。

次第に炎は収まった。そして、鍋は真っ黒に、その中には発癌性物質があった。

「うう～……鶏さんごめんなさい」

歩はひたすら鶏に謝るしかできなかった。

「どうしてこうなるのよお～！ これも全部、あのマッ

ドサイエンティストのせいだ。**絶対に丑の**

**刻参りしてやるんだから。決定**

**!**」

あくまでも不幸なマッドサイエンティスト櫻井である。

「それにしても、なにか作らないといけないよね……」

しかし、歩が調理をすると必ず火事未遂になってしまう。このままでは、歩は放火犯だ。

そこで、歩は考えた。

「そうよ。火を使うからいけないのよ。出来合いのもの……そう、例えばサラダとか。そうよ、どうして思いつかなかったんだらう。サラダがあるじゃない。サラダなら、あたしにだって」

そう考え、歩は野菜を適当な大きさに切ろうと、まな板に野菜を乗せ、両手で包丁を振り下ろす。しかし、その勢いで野菜は吹っ飛んでしまう。

「あ～あ」

結局、その日の朝、レイファの朝食が並ぶ事はなかった。

しかし、これによって紫藤家の全員の命は守られた。

「あっちゃ……どうしよう」

鍋に付いた卵を取ろうと、歩は必死になるが、結局オロオロするだけでなにもできない。

「そうだ、油をひかないといけなかったんだ」

と、歩は油を……、

——**ポウッ!**

入れてしまった。途端に鍋が炎に包まれる。中華は炎の料理だ……が、これは中華ではないし、常識を遙かに越えており、天井を焼こうかという勢いだ。

「……………」

歩は、ただただ鍋を見つめていた。

次第に炎は収まった。そして、鍋は真っ黒に、その中には発癌性物質があった。

「うう～……鶏さんごめんなさい」

歩はひたすら鶏に謝るしかできなかった。

「どうしてこうなるのよお～！ これも全部、あのマッドサイエンティストのせいだ。絶対に丑の刻参りしてやるんだから。決定

！」

あくまでも不幸なマッドサイエンティスト櫻井である。

「それにしても、なにか作らないといけないよね……」

しかし、歩が調理をすると必ず火事未遂になってしまう。このままでは、歩は放火犯だ。

そこで、歩は考えた。

「そうよ。火を使うからいけないのよ。出来合いのもの……そう、例えばサラダとか。そうよ、どうして思いつかなかったんだらう。サラダがあるじゃない。サラダなら、あたしにだって」

そう考え、歩は野菜を適当な大きさに切ろうと、まな板に野菜を乗せ、両手で包丁を振り下ろす。しかし、その勢いで野菜は吹っ飛んでしまう。

「あ～あ」

結局、その日の朝、レイファの朝食が並ぶ事はなかった。

しかし、これによって紫藤家の全員の命は守られた。

## 【運命の登校.....尽きない心配】

---

運命の時間が来た。

初めての登校。

そして、気を揉む時間の始まり.....いや、もう始まっているか。だけど、これからは今までとは桁違いだろう。本当に心配だ。

「どうしましたの？」

そんな俺の様子を見て、レイファが訊いてくる。

「ちょっと.....な」

「わたくしたちの事が心配ですか？」

「ああ.....正直、心配だ」

「わたくし.....いえ、あたしなら大丈夫ですわ.....じゃない、大丈夫だよ」

.....心配だ。なんとか大丈夫そうだが、それでも心配だ。

「.....」

「だから、大丈夫だって.....おにい.....ちゃん」

照れ臭そうに俺の事をそう呼ぶレイファ。そりゃ、恥ずかしいだろうけどさ。

だけど、まあこの調子なら大丈夫かもしれないな。あとは、櫻井頼みってところか。あいつが一刻も早く、偶然でもなんでもいいから薬を完成する事を願うばかりだ。

「レイファ.....頼むな」

「わかってるよ、お兄ちゃん」

さすがレイファの順応能力だ。感服だ。

「お兄ちゃん、遅刻しちゃうよ」

「ああ」

なんだか、中身が入れ替わったなんて嘘みたいに見える。.....だけど、本当なんだ。現実には歩とレイファは入れ替わってしまった。嘘ならなんでもないのにな。

そんな事を考えながら俺は家を出た。

いつも歩と通っている道。今日も傍目にはそう見えるのに、本当は違う。不思議だな。

そのまま会話少なく俺たちは学校に着いた。その時、レイファ（歩）も到着した。

「お、おはようございますわ」

青い顔の歩であった。



## 【歩の言いたい事】

---

「どうしたんだ、あゆ……レイファ」

つい、歩と言いそうになってしまった。俺の方がまずいじゃないのか。あれだけレイファを心配しておきながら、俺の方が……いかんな、これじゃ。遺憾だ。

「じゃあ行こうか、お兄ちゃん。ほら、レイファさんも行こうよ」

「ああ……」

「そ、そうですわ……ね」

レイファの演技力に唖然とする俺と歩。すごい、何度も云うがすごいぞ。

校門を入ると、俺はレイファ（歩）に訊いた。

「どうしたんだ、歩。なんだか元気が無いみたいだけど」

「そうなのよ、昨日は本当に大変だったんだから」

「そういや、昨日は敷地内で迷子になったんだっけ？」

「もう、森の中で迷子になっちゃってさ。死ぬかと思ったよ」

「大変だったな」

「大変でしたわね」

レイファも本来の口調に戻る。その使い分けはすごすぎだ。お前は女優向きかもしれないぞ。

「それにさ、今朝は今朝で朝食作らなくちゃいけなくて……ねえレイファさん、いつもレイファさんが朝食作ってるんですか？」

「ええ、そうですわ。花嫁修業の一環ですわ」

「歩、お前料理出来ないよな。どうしたんだ？」

それが俺の心配事だった。

「……朝食抜きになっちゃった。失敗しちゃってさ……もう、発癌性物質ばかりで、命にかかわっちゃうから……って、そうでなくても命にかかわるんだけど」

まあ、その事実を理解しているだけ、こいつは偉い。普通、自分で殺人料理が得意だなんて言わないよな、ホント。

## 【これからの杞憂】

---

つうわけで……っと、物語は突然に始まるのさ……なんて、どこぞのゲームの主人公の友人のセリフはおいといて、なにせよ登校してしまったわけで、登校したからには授業に出なければいけない。

まあ、レイファなら大丈夫か。……多分、あの調子でやってくれば大丈夫だろう。

問題は歩なわけだが、こっちは俺がフォローすればなんとかなるかもしれない。まあ、レイファは元々友達が少ないから、ばれる心配はまず無いだろう。別に嫌われているわけではないが、どうも近寄りがたいオーラが全身から出ていたからな……。もっと、気さくで軟派な白と紫のオーラでも出てればよかったのだが……。

その頃、歩の姿のレイファは……。

「おはよう！」

元気よく挨拶をして教室に入っていった。

「おはよう」

「おはよう、歩」

「歩、おっす」

などと、クラス中から返事が返ってくる。どうも、毎日こうなのだろう。

しかし、ここまで歩を演じているレイファはすごい。これで、誰が実はレイファなのだと思うだろうか。オスカー級だろう。もしノミネート可能であるなら、受賞確実かもしれない。

「おはよう、歩」

「おはよう」

事前に聞いていた席に座って普通に話を始める。

「昨日のあれさ……」

「うん……」

そこに違和感はなかった。むしろ、ここまでとけ込んでいるという事が違和感と云えばそうなのだが……。

こうして、不動和己の杞憂は杞憂に終わりそうなスタートであった。

## 【ここは研究室マッドサイエンティスト櫻井の城】

---

不動和己、不動歩、紫藤麗華が登校していた頃、マッドサイエンティストの異名を持つ櫻井純平はフラスコに囲まれうっとりとした表情をしていた。

様々な機材や薬品に囲まれたこのプレハブ小屋の研究室はまさに彼にとって居城であり、心休まる安住の地でもある。

そんな至福の時を過ごすはずのこの場所で、櫻井純平は苦悩していた。

「やっぱり、あれは偶然だよな……」

なんとしても幻の薬品であり、彼にとってはノーベル賞をもたらすはずであった超電導液制作に必死になっていた。

これを完成させなければ、紫藤家の権力をして消されてしまうかもしれないという恐怖に駆られ、櫻井はなにがなんでも作らなければならなかった。

実際、そんな事はないのだが、あくまでも個人的に勝手にそう思っていた。

「くっそ……このままじゃ、ノーベル賞どころか、明日さえないかもしれないってのに……奇跡を我に！ でも……起きないから……否、起こすんだ。そうさ、起こしてこそ奇跡。それこそが軌跡となってノーベル賞をもたらすんだ。はっはっはっ……待っている、紫藤麗華、不動兄妹よ。この櫻井純平の真の力を刻んでやる。そうだ、この櫻井純平の名を刻むがいい！」

櫻井は自分以外は誰もいない研究室の中で熱く語る。

その力強い手に握られた試験管が握力によって木っ端微塵になる。

「しまった……やっちまった……」

櫻井は砕け散った試験管を茫然と見る。

「まあ、空の試験管だし、いっか……ってよくねえ！ 部費が削られそうなのに……これ

以上、費用が…… **のーん！**」

次の瞬間には後悔する櫻井であった。

こんな調子で、超電導液は一向に完成の兆しを見せない。

## 【降って湧いたデマ】

---

「どうしたよ、和己」

同じクラスの渡瀬章一郎が声を掛けてきた。

「なんだ？」

俺は怪訝そうに答える。つうか、マジでうざい。今は誰とも話をしたくない気分だ。

まあ、それだけ歩（外見はレイファ）が危なっかしいわけなのだが……。

「お前、いつからレイファと仲良くなったんだ？ 一緒に登校したりさ、やけに親しそうじゃんか」

……確かに、急にだもんな……こいつでなくとも気にはなるか。

「気にするな。なんでもない。つうか、たまたま校門の所で会っただけだ」

「誤魔化すんじゃないぞ、和己。俺は……俺たちは知っている。お前は昨日レイファと……  
これ以上は俺の口からは言えん」

「言えないって、なにがだ。俺がレイファとなんだっつうの」

「……いや、お前の人生に関わる事だからさ……軽々しく口に出れないのだよ。わかってくれたまへ」

……こいつ、どんな妄想をしてやがるんだ？

「わかった。とにかく言え。言わないと……」

……なにしよう。正直考えてない。つうか、思い浮かばない。

「仕方ない。金の力にももの云わせて外国に売っ払われちゃかなわんからな。……和己、おめでとう」

……は？

「……なにが？」

「これでお前も大物の仲間入りか……いつまでも友達で……いや、親友でいてくれ。俺はお前を唯一無二の親友だと思ってるぞ」

……さっぱりわからん。

「なにがだ？」

「いや、レイファと結婚するんだろ？」

……あんですとーっ！

「あんですとーっ！」

つい叫んでしまう。お前なんか猫の……おっと、これ以上はいかん。

だが、どこからそのような話が……つうか、俺は聞いてないぞ。

だいたい、俺とレイファが……け、け……マリッジだとお！ ぷ、ぷ、ぷじゃけるなっ！

どこのどいつだ、そんなぷじゃけた事ほざくのは。

「違うのか？」

サラッとしたスマイルで訊くなよ。

「てっきり、今日のお前らを見て本当だと思ったんだがな……。ったく、デマかよ。つまんねー。せっかく、大富豪の友人になって金を借りまくって企業でも経営して、がっぽりしっとりと生きようと思ったんだがな……。俺の人生設計が音をたてて崩れていく……カムバック・マイ・ライフ！」

……ったく、誰だよ、んな事噂にしやがったのは。つうか、お前の人生設計はおかしいぞ。

「はあ……どうして俺の周りはこのばっかなんだ？ 暴力的な妹にお嬢のクラスメイト。さらにはマッドサイエンティスト……そしてこいつ。まともなヤツはいないのか」

「死んでみる？」

耳元で不気味な音がした。

「ねえ、いっぺん死んでみる」

囁くような……俺にだけ聞こえるような小さな声が……。

振り向くとそこにはレイファがいた。怖い。口許が引きつっている。

「どこの誰が暴力的な妹なのかな？ お兄ちゃん」

「お前、人のココロを読む能力を持っていたのか。櫻井の薬品の副作用か？」

「バッチリと口に出してたわよ。お花畑のお姉さんに会わせてあげるね」

「か、勘弁」

ったく、ついてない……って、イヤだあ！

## 【研究室までの道】

---

ーキーンコーンカーンコーン！

色々あったが、なんとか昼休みまで無事に辿り着けた。

砂漠の真ん中でオアシスを見つけたような気分だ。

「じゃあ、研究室に行きましょうか」

レイファが声を掛けてきた。

「ほら、ちゃんと作ってるか見に行くわよ、お兄ちゃん」

と、小声で俺にだけ言う。

「わかったよ」

俺は怠そうに答える。……そうじゃなく、マジで怠い。かったる。

「じゃあ、歩も誘っていくか」

「そうですわね」

無理っぽい演技をする歩。やはり、こいつは女優には向かないな。

「うっしやー！　もう一息だ。さすがノーベル賞最有力候補。仕事の早さが違うね。誰も僕には敵わないのだ。そう、世界は僕の手。世界は僕が支配する。はっはっはっ……」

相変わらずのマッドな思考と高笑いが響き渡る。

「度肝を抜かしてひれ伏すがいい。この僕の才能をうらやむがいい」

「ねえ、レイファさん」

「なんですか、歩さん」

本来の自分のキャラに戻って会話を始める二人。違和感満載だ。

「丑の刻参りって、あの森の中でやってもいい？」

……なに？　丑の刻参りだと？

「ええ、構いませんわよ。迷子にならないように気を付けて下さいね」

ってか、容認か。しかし……迷子にならないように気を付けろか……実際にその場所を見てないからなんとも言い難いが、よほどなんだろうな……興味が湧くな……。

## 【そして、研究室】

---

「櫻井、なんたら液はどうだ？」

「不動和己、超電導液だ。何度言えばわかるんだ、お前は。そんな事も憶えられないのか。お前の事をこれから鶏の頭脳と呼ばせてもらうぞ」

.....鶏の頭脳.....三歩歩けば忘れるとかってヤツか？

真実は知らないが、けど.....イヤだあ！

「櫻井、俺が悪かった。俺の愚かさを認める。だから、そのあだ名だけはやめてくれ、頼む」

「わかればいいのだ。そうさ、世界はこの僕にひれ伏すがいい。そして、僕を崇め奉るがいい！」

.....それはイヤだ。

やっぱり、こいつの思想はマッドだ。世界征服って、こういうのが望むのだろうか.....？

いや、実際はもっと.....やっぱ、なんにせよ凡人の俺には理解できないな。

「そんな事はどうでもいいですわ。なんにせよ、世界征服などわたくしが赦しませんが。それよりもですわ。超電導液はどうなりましたの？」

歩の姿で言われると、やっぱ違和感があるよな.....。

「そうだ。よく訊いてくれた、紫藤麗華よ。その質問を待っていたのだ」

「まさか、完成したの？」

歩が嬉しそうに言う。ってか、昨日はそれほどまでに大変だったのか？ 心底嬉しそうだ。

「ふっふっふっ.....」

「櫻井、もったいぶらずにさっさと言え」

「諸君、慌ててはいけない。急がば回れ。果報は寝て待て.....そう、先人たちのありがたい言葉を刻み込むのだ」

「わかったから、さっさと言えよ」

「さっさと言いなさいよ」

「ねえ、どうなったの？」

「それはだね.....あ、そろそろ時間だ。続きはまた明日」

【櫻井純平の読者の皆さんへ……】

---

「というわけで、昨日の続きだが……」

「昨日って、あれから数秒しか経ってませんわよ。あなた、なに言ってますの」  
歩の姿で怒るレイファ。

「そうですよ。だいたい、誰に向かって言ってるんですか？」

レイファの姿の歩もご立腹の様子だ。

「誰って……そんなの読者の方に決まってるじゃないか。そんな事もわからんとは、これだから凡人は困る。最も重要な事をわかっていないとは……。だいたい、次に引っ張る時にはだな……」

「わかった。わかったから、本題に入れ。また、時間切れとかは問題だろ」

「なにを言う。これを時間稼ぎと云うのではないか」

「時間稼ぎはいい。だから、早く本題に入れ」

「仕方ない。そこまで言うのなら、本題に入るとしよう」

最初からそうしてればいいんだっての。

「で、例の我が最高発明品である超電導液だが、ほんのつい今し方完成した。反応をみたところ、昨日のものと同じ反応があらわれた。まあ、一日で完成するところなんか、ご都合だがな……」

「んな事はどうでもいい。早く二人を元に戻せ」

「慌てるな、不動和己よ。この薬品は、電気を伝えるものなのだ。あくまでもその媒介としてしか機能しない。つまり、電氣的刺激……そう、昨日のような衝突が必要不可欠なのだ」

「つまり、昨日のようにぶつかればいってわけか」

「そういう事だ。というわけで、不動歩、紫藤麗華。さっさとこれを持ってゴツンコしてくれたまえ。そうすれば、元に戻れるはずだ」

信頼性が希薄だが、それに賭けるしかないと判断したのだろう。二人はお互いを見て頷いた。  
いよいよ、俺の苦勞も終わるのか。



## 【信じられるのはご都合主義のみ！】

---

「いきますわよ」

「どこへでも」

わけのわからんやり取りだな、おい。だが、二人の目は真剣だ。やっぱ、元に戻りたいんだろうな。そりゃ、それが普通なわけだし。

「レッツゴーですよ、レイファさん」

「オーケーですわ」

……わけのわからんやり取りが続く。……続くだけで、二人は一向に動こうとしない。

「おい、なにやってんだよ。さっさと元に戻るんじゃないのか？」

痺れを切らした俺がそう言うと、

「お兄ちゃん、あたしたちの恐怖がわかってないでしょ」

「恐怖？」

「そうですね。わけのわからない薬品を持たされて、しかもゴツンコしろだなんて、狂気の沙汰ですわ」

「確かに」

俺は櫻井を見る。櫻井は腕を組んでドンと構えている。自分の発明品がどうなるのかワクワクしているようだ。

「櫻井、大丈夫なんだろうな」

「不動和己よ、僕を信じろ。そして、ご都合主義を！」

高らかに宣言する櫻井。こいつを信じろってのが無理だな。やっと、二人の気持ちが分かった。

「そうですね」

「そうよね」

二人は覚悟を決めたようだ。真剣な表情になる。

「櫻井さんは信じられないけど」

「ご都合主義を信じますわ」

……ははっ。櫻井、お前の皆無に近かった信頼は地に墜ちたな。

「歩さん」

「レイファさん」

二人は櫻井が発明した超電導液を持って走りだした。ゴツンコするために……。

【ただいま、お兄ちゃん】

---

## ーゴツツンコッ！

.....なんて音は鳴らないが、効果音として表現すればこうなるだろう。漫画なんかだと、☆がキラキラと舞っているような場面だ。☆多なんてものも舞っているかもしれない。

フラスコが割れ、中身が二人に.....そして二人はゴツツンコ。あの時の.....昨日の光景がそこにあった。

ついに、とうとうこれで元の生活に戻れるんだな.....。俺は喜びに満ちていた。

よかった.....素直にそう思う。このままだと、妙なフラグが立つところだった。

そんな不安もこれで解消される。

「あいたたた.....」

頭をさすりながら先に立ったのは歩だった。

「.....歩？」

俺はきっと変な顔をしていただろう。不安、期待、心配.....なんだかわからん気持ち。

「.....お兄ちゃん」

歩の口からその言葉が発せられた。

「歩、元に戻ったんだな」

「.....そうみたい」

その間にもレイファも起きあがった。

「どうやら、ご都合主義に助けられたようですわね」

「違うだろ。全てはこの僕のお蔭だろ」

「そうだな、ご都合主義に感謝しないとな」

「お兄ちゃん、元の生活に戻れるんだね」

.....ってか、それほどまでに辛かったのか？ まあ、今夜はじっくりと昨日の悪戦苦闘苦労話を聞いてやる事にしよう。

「わたくしは、歩さんとしての生活も結構楽しかったですけどね」

俺はゴメンだ。だが、あの朝食は捨てがたい。

「レイファ、まあ、たまに遊びに来てもいいぞ。俺も一度お前の家に行ってみたいしな」

俺の中でなにかが変わったのだろう。

こうして、ぷじゃけた物語は終わった。

*F i n o .*

R-3 あたしはあなた？ あなたはあたし？

<http://p.booklog.jp/book/32120>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32120>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32120>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.